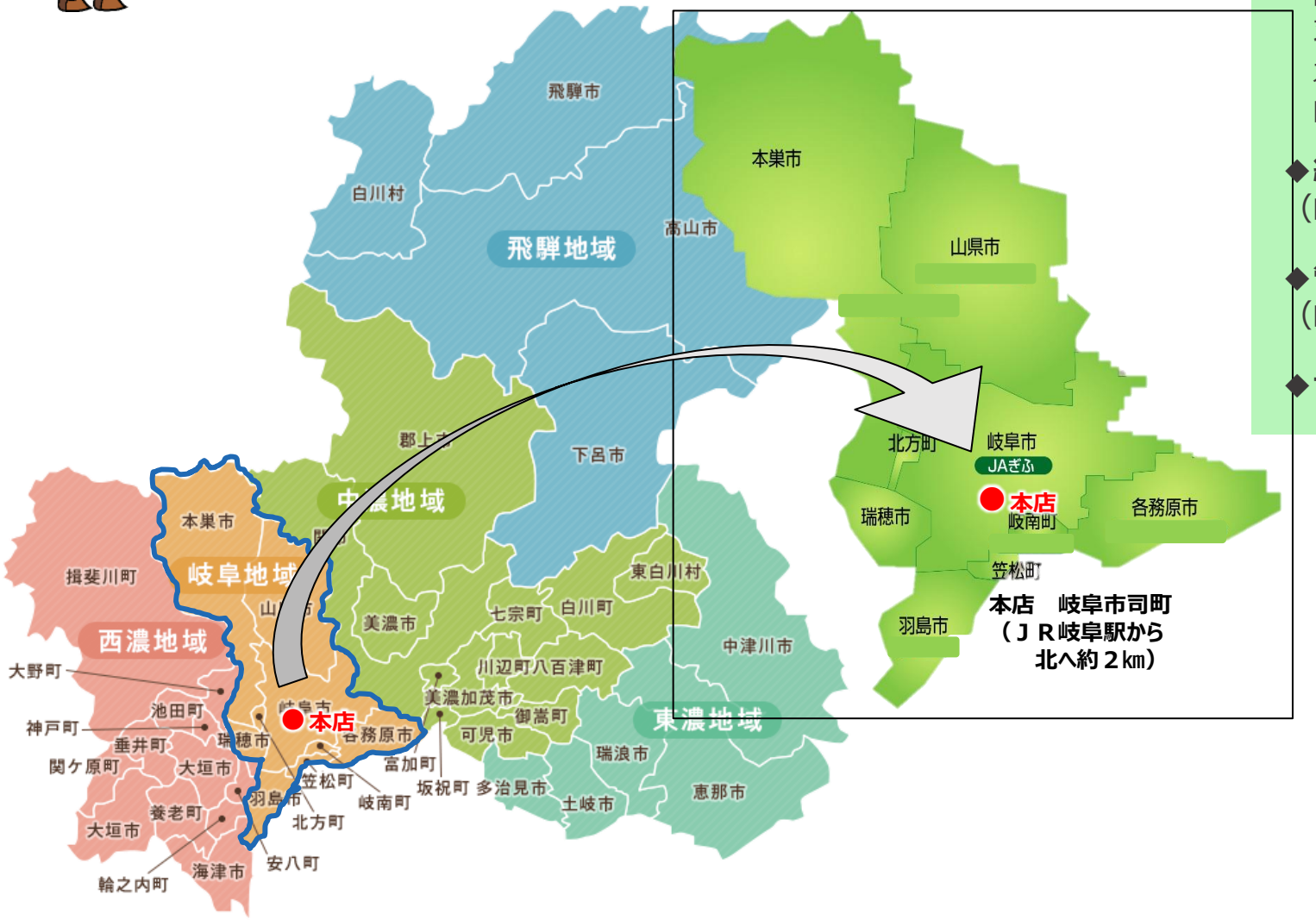
協同組合間連携

JAぎふの生消連携の取り組み

2026.2.20　新世紀JA研究会
ぎふ農業協同組合　相談部　笠原　茂

JAぎふの管轄



◆**岐阜地域（６市３町）**
岐阜市・各務原市
羽島市・瑞穂市
本巣市・山県市
岐南町・笠松町・北方町

◆**総面積約994ｋ㎡**
（岐阜県総面積10,620ｋ㎡）

◆**管内人口　78万人**
（岐阜県人口193万人）

◆**世帯数　33万世帯**

ＪＡぎふの概要

●創　　立　　昭和38年9月4日
（平成２０年４月合併）

●本店所在地　　岐阜県岐阜市司町３７

●組合員数	97,464人	●貯金残高	1兆377億円
うち正組合員	38,796人	●貸出金残高	2633.6億円
うち准組合員	58,668人	●長期共済保有高	1兆6485億円
●役員数	51人	●販売品販売高	61.7億円
うち常勤役員	6人	●購買品供給高	89.4億円
●職員数	919人		
●支店数	40支店（1営業部,9ふれあいプラザ）		
●子会社等	(株)援農ぎふ ＪＡぎふ総合サービス(株) (株)JAぎふはっぴぃまるけ (一社)JA成年後見センターぎふ		

令和7年3月末現在

おんさい広場　・朝市グリーンなど
（大型産直施設３か所を含む14店舗）

ＪＡぎふイメージキャラクター「みのっ太」は６地域の特産品で誕生!!

エダマメ
(岐阜地区)

徳田ねぎ
(岐阜南地区)

アスパラガス
(羽島地区)

富有柿
(本巣地区)

ニンジン
(各務原地区)

利平栗
(岐阜北地区)

からだはJAぎふ
管内の特産品で
できているんだ♪

ＪＡぎふイメージキャラクター
みのっ太

協同組合の目的【地域の農業と暮しの向上と地域の活性化に貢献する】

JAぎふ

『JA綱領』を基軸に

『経営理念』をJAぎふで策定し

『フレームワーク』を共通の認識（ベクトル）とし

『めざす姿2030』という将来像を掲げ

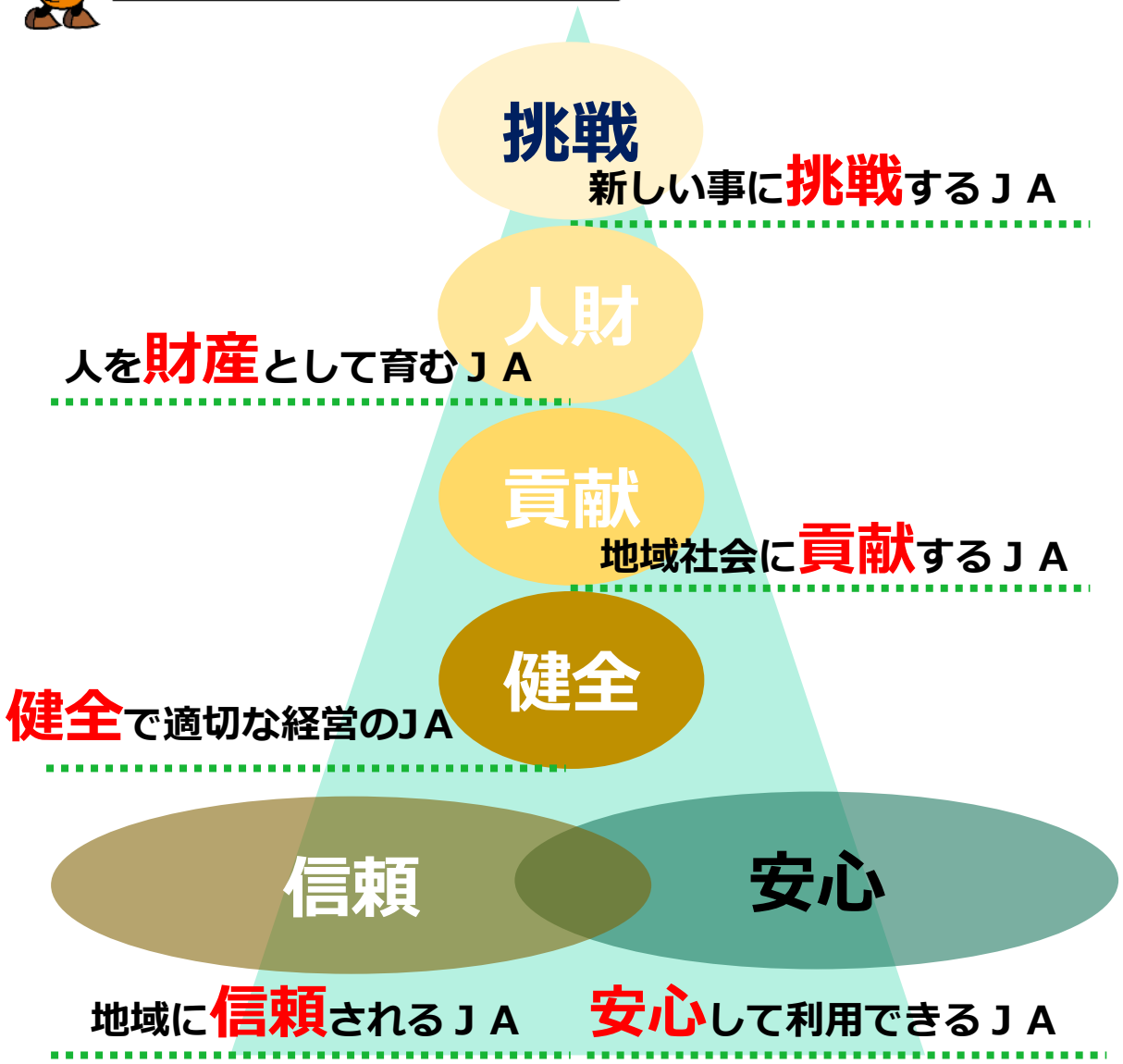
『すべては組合員とともに』をメインテーマに

『中期経営計画』と『営農ビジョン』を策定し

成果と活動の方策を『単年度事業計画』で設定し

『プロセス』を用いて目的を実現します。

経営理念



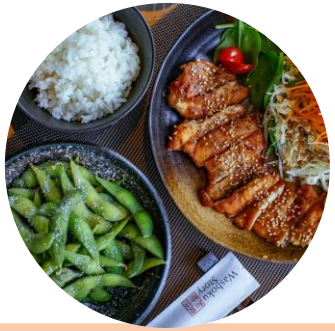
地域の農業を守るとともに地域に**信頼**され、**安心**してご利用いただけるよう、**健全**で適切な経営に努めます。

また、地域社会に一層**貢献**するため、人を**財産**として育み、たえず新しいことに**挑戦**していきます。

協同組合の目的である【地域の農業と暮らしの向上と地域の活性化に貢献する】のため、ＪＡぎふは「めざす姿」として取組んでいます。

おさらいから取組みへ　　Ｊ Ａぎふのめざす姿

2030年めざす姿



活力ある農業

持続可能で多様な農業

地域の担い手の活動支援と、家族農業の継続をめざすとともに、地域の食を支えているという誇りと安定した所得の確保により、後継者や新たな農業者が参入したいと思うような魅力的で持続可能な農業を実現します。

ＪＡぎふの取組み
☆環境調和型農業　☆スマート農業
☆蔵出米　☆根尾米　☆徳川御前籾（もみ）
☆有機の里構想　　☆ぎふラル

地消地産とは消費者が求めるものを把握し
ニーズに合わせた農畜産物の生産を行うもの

豊かな地域社会の実現

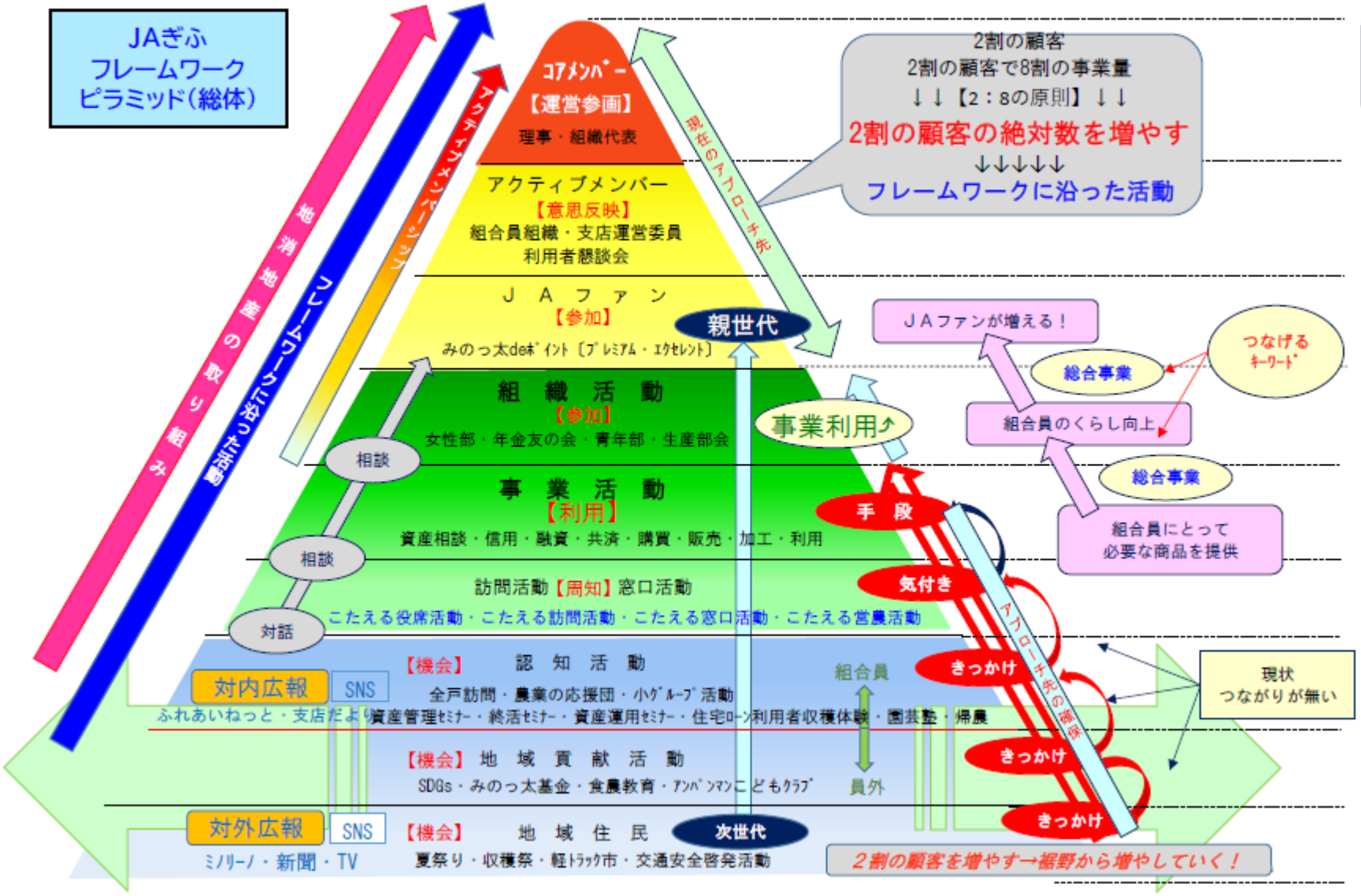
食と農を基軸に、消費者と農業者がお互い尊重しあえる地域社会

木曽三川により育まれた豊かな土地や豊富な水など、自然環境に恵まれたこの岐阜の地においても、人口減少や地域コミュニティの希薄化という社会問題は避けられない状況です。そのようななか、農業者と消費者が「食」と「農」を基軸として、お互いが尊重しあえる地域づくりが求められています。このような状況に対応するためには、地域の魅力を積極的に発信し、既存の総合的なサービスを提供するだけでなく、市町との連携や協同組合のネットワークを活用することで、少子高齢化などの社会変化に対応した新たなサービスを継続的に開発し、組合員や地域住民の協同活動への参画のもと、豊かで幸せな生活を送ることができる地域社会を実現します。

フレームワークに沿った活動は協同活動（事業・組織活動）の実践によりＪＡファンを増やす活動です

【フレームワーク】＝職員の行動指針

私たちは、組合員の期待に応えるため、支店が中心となり 総合的なサービスをもって、組合員の財産活用とくらしのお手伝いをします



『きっかけ』から『JAファン』へ

このピラミッドは
JAぎふが『きっかけ（機会）から
JAファンへ』の新たな仲間づくりに
ついて、私たちの仕事をこの枠に当てはめ、
何が課題でどんな活動を行っていくか職員
全員に周知し明確に伝えています。

フレームワークに沿った活動とJAファン

私たちは、組合員の期待に応えるために、支店が中心となり、総合的なサービスをもって組合員の財産活用と暮らしのお手伝いをします

JAファンを増やす
事業利用のほかJAとともに
地域の農業と生活を考え守っていく組合員
【運営参画】

JAの事業や活動を理解するJAファンから
次世代や家族・親族や知人に
JAへの活動と利用を勧める
（紹介による新たな仲間づくり）

事業利用と女性部・年金友の会などの
組織活動に参加しJAとの接点を深める
（意志反映）

JAと農の理解と事業利用を提案
きっかけで始まった『会話』から『対話』『相談』につなげ
JAの事業を提案、納得し利用いただく

きっかけから職員やJAを知ってもらい参加と利用を促す（組合員加入：仲間づくり）

【支店協同活動・一職員一協同活動・地域貢献活動】

JAぎふが地域・組合員・地域住民の交流と橋渡しを行う

JAファンとは

○JAぎふと一定量の事業利用がある
（概ね、みのっ太deポイントのエクセレントステージ以上）

○支店運営委員やJAぎふの各種団体の役員などを務めたり、支店協同活動の企画や準備・運営に参加している

JAぎふや農業・地域のために意見や質問を言っていただけ、JAぎふとともに課題解決に取り組んでもらえる組合員さん

【フレームワークに沿った活動』を促進するために・・・

【フレームワークに沿った活動』を促進するための4つの取り組み

提案ミーティングの実践

職員の人財育成・職場の活性化・組合員へ最良の提案の実現

・多くの職員によって知恵を出し組合員へ最良の提案ができる　・職場の活性化
・職員間のコミュニケーション向上　・特に若手職員の不安解消・成長の場

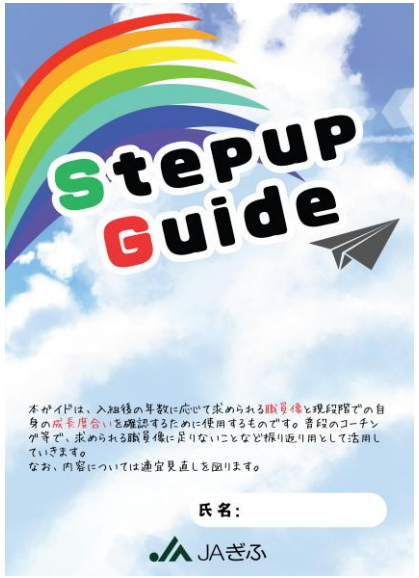
『組合員や地域からの　大切な声をカタチに』
暮　ら　し　の　相　談　受　付　簿

暮らしの相談受付簿

一人ひとりの暮らしに寄り添い、暮らしから発せられる思いに
かみ合った商品やサービスを提案する力

コーチングの実践【人を財産として育むJA】へ

めざす姿や悩み・課題を共有し職員の更なる成長へ上司と部下がともに歩む



ステップアップガイド

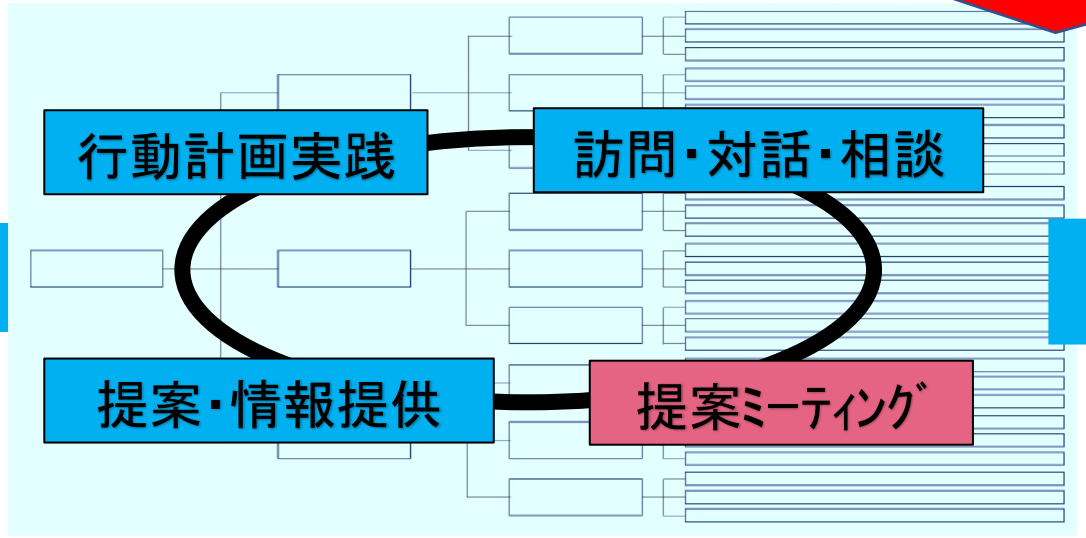
入組年数に応じた理想の職員像を見える化したガイドブック

プロセス評価

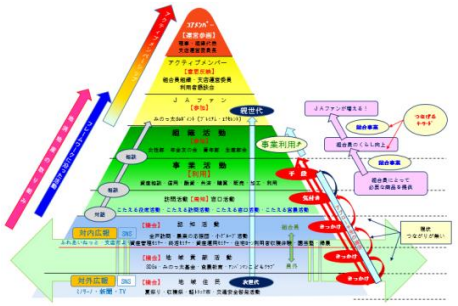
【すべては組合員とともに】と
【フレームワーク】を具現化します

単年度事業計画 → 各事業目標設定 → 推進項目設定 → ・契約してくれそう ・加入してくれそう ・農協がお願いしたら断らなさそう ・話を聞いてくれそう・・・など 成果が出やすい組合員・利用者をターゲットとした推進活動 → 事業レビュー 数値の管理 → 業績を考課し処遇・顕彰 → 次年度事業計画

単年度事業計画 → 事業取組方針～行動計画設定 →



→ 行動から成果につなげるプロセス評価レビュー → 行動から成果につながる事を考課し処遇・顕彰 → 次年度事業計画

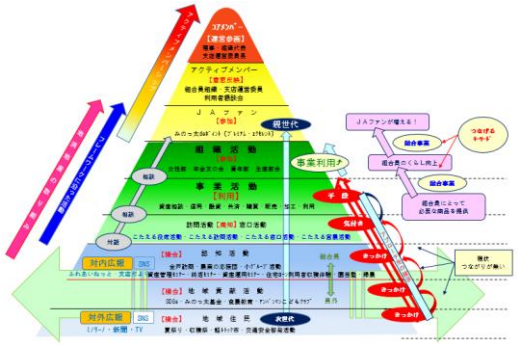


組合員の不安や課題の解決を、総合事業を駆使し提案を行い
“ＪＡぎふ”について理解いただき納得し、仲間を増やし事業利用につなげる

つまりは《フレームワークに沿った活動の実現》するため

様々な行動【プロセス】で組合員との接点や対話を深める取組み

プロセスは～目の前の成果だけでなく、成果に至る過程を考え行動する事です～



事業取組方針

重要成功要因

重要施策

行動計画

プロセスは【事業取組方針】実現するため【重要成功要因】を定め
成功に導くため【重要施策】を設定し、各施策の具体的な取組みが【行動計画】です。

岩佐組合長からのメッセージ

アップ

成果

停滞

まだまだ

プロセス活動の理解度

高い

③フレームワークに沿った活動を

行なわずに成果が上がる人

➡プロセス活動を加えてより良い成果を目指して欲しい

①フレームワークに沿った活動を

行う事で成果がついてきている人

➡このまま頑張って欲しい

④行動もうまくいかず

成果も上がらない人

➡まずはプロセス活動を意識（理解）して、行動からはじめて欲しい

②フレームワークに沿った活動を

行っているが成果がついてこない人

（成果につながっていない人）

➡プロセス活動の思いや発信の仕方が適切なのかもう一度考えて欲しい

蝶を集めるには花から育てよ

「蝶を集めるには花を育てよ」という言葉がある。蝶を捕まえようと追いかけ回しても、逆に蝶は逃げていってしまう。花を育て、蝶が「集まってくる環境」をつくること、つまり、物事何でも「いきなり」ではなく、ワンクッション置いて考えることの重要性を指摘している。組合員の「顧客化」が問題となっている今日の協同組合運動のあり方を考える上で意義のある言葉だろう。

ＪＡの事業推進を揶揄する言葉に「逃げる組合員、追うＪＡ」がある。協同組合の「出資・参画・利用」の三原則を大上段に振りかざしても、組合員はついてこない。組合員を「顧客」として追いかけるだけでは、もう沢山だと嫌がられ、それこそ逃げられてしまう。

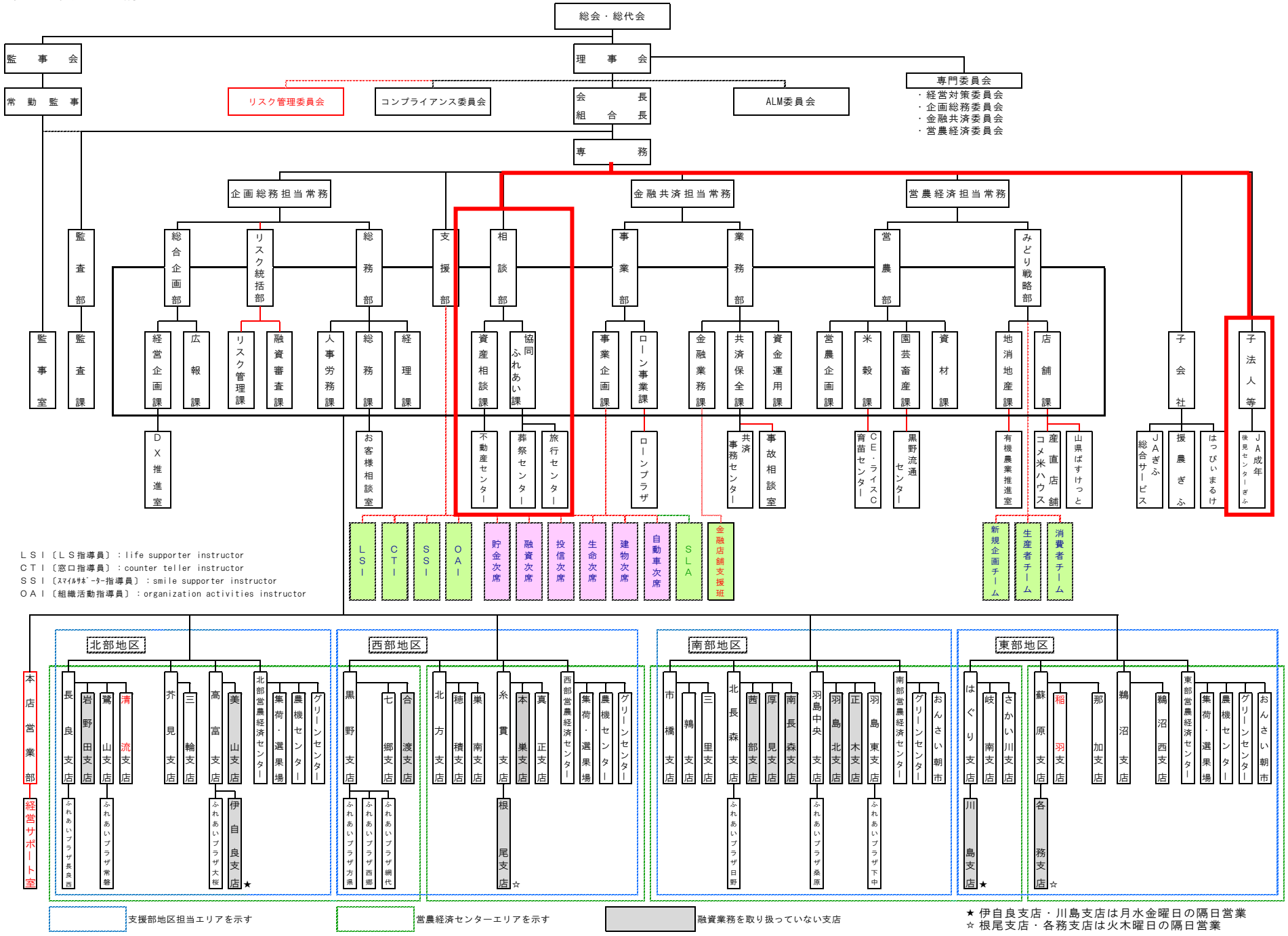
「集める」と「集まる」とでは、「め」と「ま」の一字で大きな違いがある。協同組合は、当然、組合員が「集まる」でなければならない。

では、ＪＡぎふにとって「集める」花は何か。それは、フレームワークに沿った活動であり、ＪＡぎふが活動や情報を発信し、相談と対話から地域を良くしたいという想いを持ち続け、組合員と共に考え、共に学び合うなかで、組合員がJAの事業・活動を理解し「私たちのJA」となることが「集まる」前提となるだろう。

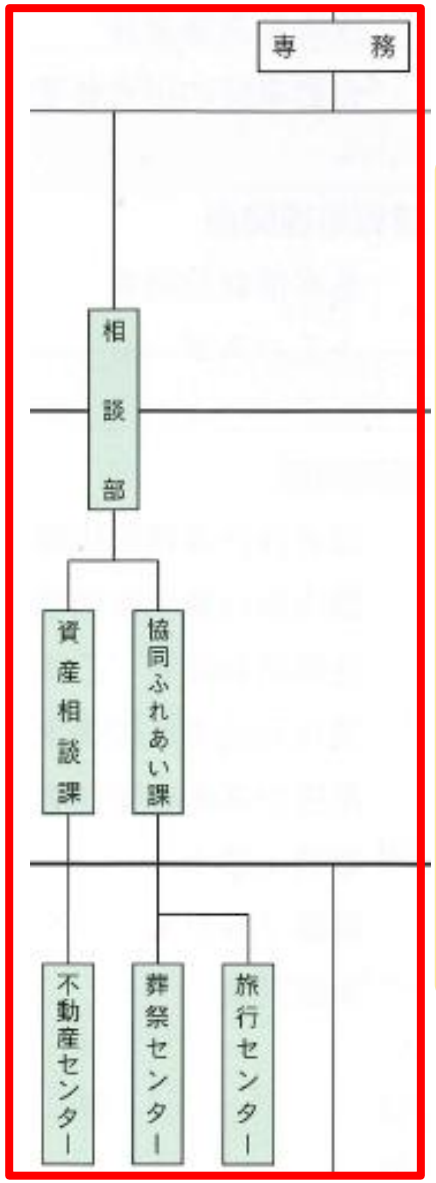
地域に根ざした協同組合活動ついて「自ら考え行動」し、自分たちだけの活動に留まらず、開かれた組織として、地域のいろいろな組織とネットワークを組み、協同の輪を広げていくべきだろう。そのネットワークを通じて「何かあったらJAに相談。JAがあってよかったね」と地元住民の評価が高まり、支持や共感が広がっていけば多様な人びとや組織との接点ができ、それが社会的存在感の醸成となっていくだろう。

【にじ　2010年 秋号 No.631】の松岡公明氏の文書にJAぎふのフレームワークに沿った活動を入れ加工しました。

令和7年度　機構図　【内部用】



相談部の概要



★専務直轄で迅速な業務執行
★業務は、資産相談から組織活動や組合員教育、職員育成まで多岐

資産相談課　…　組合員が保有する資産全般に関する相談業務
資産相談担当者の（宅建士）育成
資産管理情報の発信
不動産事業（不動産センター）　等

協同ふれあい課…　支店・プラザ運営委員会総括
旅行センター管理
家の光・農業新聞の購読管理
ふれあいプラザ・女性部組織の企画運営
支店協同活動の促進・統括
暮らしの相談受付簿とつなぐつながるBOXの展開
JA-MASTER学習
食と農の連携推進フォーラム
地域とくらしのサポート　組合員大学準備室　等

子会社（株）JA総合サービス：葬祭センター
子法人（一社）JA後見センターぎふ

支店・プラザの行動プロセスにおける支援体制　【相談部門】

次世代との対話から【総合的なサービスで財産活用と暮らしのお手伝い】

相　続　前　→　相　続　後

活動をきっかけとした対話から相談対応

- 支店・プラザ協同活動
- 相続・終活各セミナー
- 相続シミュレーション
- 終活ノート作成支援
- 遺言作成
- 資産活用
- 納税準備
- 争族対策
- 遺言・家族信託

相続発生

- 葬儀前対応
- 葬儀後対応

遺　産　整　理　対　応

- 遺言執行
- 相続手続き支援
- 相続税申告納付
- 遺産分割
- 遺品整理
- 登記・名義変更
- 二次相続・資産活用

豊かに暮らせる地域社会づくり

協同活動の実践から組合員や利用者の拡大

◆支店・プラザを拠点に、食と農を基軸としたふれあいの場の提供

◇高齢者の見守りによる暮らしのサポート

◆女性組織活動の認知に向けた情報発信

◇斎場の認知度向上によるJA葬祭事業の利用拡大協同活動の実践による地域共生と共感のはぐくみ

◆運営委員会や暮らしの相談受付簿による意思反映の強化

◇組合員・利用者につなげる農業の応援団・利用者懇談会の開催

◆農業まつり・食農教育活動・地域貢献活動などの活動の充実

◇JA-MASTERと一職員一協同活動の実践による協同組合人の育成

支店・プラザが取り組む協同活動から
「仲間づくり：組合員基盤強化」「対話」「意思反映」に取り組み
行動プロセスの『私たちのJAと言っていただくための活動』につなげます。

協同組合間連携

コープぎふとの包括連携協定の取り組み

コープぎふ

みのっ太

JAぎふ

国際協同組合年

2025年は国際協同組合年、協同組合の価値と役割が改めて注目される年です。

同じ協同組合の仲間と一緒に食・農を軸とした共同事業の展開、地域課題の解決をめざします。

新春対談の様子（農家×生協×農協）
左から西垣理事、コープぎふ根崎理事長、岩佐組合長

コープぎふとの連携

2024年2月26日　豊かでくらしやすい地域社会づくりに向けた包括連携協定の締結

■地域から求められる農産物を農家に栽培してもらい地域へ提供したいJAぎふと、 消費者の求める安全・安心な商品を品ぞろえし、地域の消費者に提供したい。生活協同組合コープぎふが連携することで、農家と消費者をつなぐ架け橋となります。
この連携により、県内の消費者が地場産農産物を購入し、食すことで地域内の食の循環が加速することをめざしています。

■協定の目的
①健康で豊かなくらしに寄与する地域づくり、街づくり
②消費者と生産者を結びつける地消地産の基盤づくり
③食の安全・安心供給から地域の食料自給率向上
④相互の人材教育・人的交流
⑤本協定の趣旨に賛同する他の協同組合組織等の参画促進の
　5つの協力事項を踏まえ、販売、流通、イベントなどを検討していきます。

JAぎふ×コープぎふ　連携の目的

1. 地域に根ざした持続可能な社会の実現
持続可能な農業と、安心・安全な暮らしを支えることを共通の目的とし、地域社会全体の発展を目指す。

2. 「食」と「暮らし」の質の向上
地元産の新鮮で安全な食材の供給と、健康で豊かな食生活の提案・支援。
また、食育や健康促進に関する取り組みを通じて、住民の生活の質の向上を図る。

3. 若年層・子育て世代への支援
教育や子育て支援事業を共同で展開し、未来の地域を担う世代へのサポートを強化する。

4. 地域コミュニティの再生・強化
高齢者の見守り、農を拠点とするつながり、地域イベントの共催などを通じて、孤立の防止や地域のつながりを再構築する。

5. 双方の事業利用促進への発展
相互の取り組みを通じて組合員との接点を拡大し、JAとコープの各種事業への関心と利用を高める。

期待される相乗効果：
・地元農産物の購買促進
・金融サービスや資産運用の利用増加（JAぎふ）
・宅配・店舗利用の拡大（コープぎふ）
・高齢世帯への訪問を通じた相続相談・終活・地域貢献支援（JAによる生活支援提案）

JAぎふ×コープぎふ　連携キックオフ

開催趣旨

コープぎふとの包括連携協定も2年目を迎え、活動の幅が広がる中で、関係する部署や職員も多岐にわたるようになり
これに伴い、連携体制の見直しを行い、新たな体制での運用を開始します。
新体制（6チーム編成）の開始にあたり、連携の方向性と今後の取組について共通認識を図る。

日時・場所

日時：令和7年8月12日（火）13:00～14:30
場所：JAぎふ本店７F大会議室（岐阜市司町37）

主な出席者

・JAぎふ：組合長、常務、各チーム担当者および所属長
・コープぎふ：理事長、専務理事、関係部門責任者
・事務局：相談部 協同ふれあい課　　総合企画部 広報課

主な内容

・コープ代表挨拶、参加者紹介
・包括連携の進捗報告
・新体制の概要説明各およびチームの取組方針（概要共有）
・各チームリーダーの抱負
・意見交換・質疑
・今後の進め方・連携会議の案内

JAぎふ×コープぎふ　主な取り組み

ＪＡぎふ×コープぎふ連携　７つの専門チーム

No.	チーム名	主な取組（案）	JAぎふ	コープぎふ
1	弁当・惣菜工場設立	構想検討・事業モデル設計	総合企画部： 広報課　　： 総務課　　：	・宅配事業部・店舗事業部 ・商品活動推進部・経営戦略部 ・管理部・事業改革推進部 ※2024年10月確認した体制
2	農業振興	・農家交流 ・就農促進 ・産直店出荷者輩出	園芸畜産課： 営農企画課： 地消地産課：	・商品活動推進部 ・支所（該当支所長・副支所長）
3	農産物販売	共同開発・直接取引	店舗課　　： 園芸畜産課：	・店舗事業部 ・商品活動推進部
4	地域の拠点づくり・事業活用	拠点共有、組合員交流、共通組合員	協同ふれあい課： 支援部　　：	・事業改革推進部 ・機関運営・くらしの活動部
5	人事交流	研修・出向制度の構築	人事労務課：	・管理部　共育支援G
6	広報	職員・組合員向け発信	広報課　　： 地消地産課：	・事業改革推進部 ・機関運営・くらしの活動部
7	★追加 介護・後見事業	介護・後見事業の連携・橋渡し	後見センター：	・介護事業部：

※協同組合間連携研修会開催　11月19日（水）

コープぎふとの取組み

コープぎふ芥見店
JAぎふおんさい広場芥見販売ブース

コープぎふ長良店
環境調和型農産物の直接取引・販売

■ コープぎふ芥見店での常設販売ブースの設置

コープぎふ芥見店内にJAぎふが運営する「JAぎふおんさい広場芥見」の販売ブース常設。地元の新鮮な野菜を食べたいというコープぎふ組合員の願いの実現と、地元農業が持続的に発展することを目的として協同組合間で連携し、地消地産の促進、おんさい朝市の代替機能、生産者の販路確保などの効果の実現を図っています。

■ コープぎふ長良店で環境調和型農産物の販売開始

長良店では、環境意識の向上、持続可能な農業の啓発、農産物単価向上を目的に、環境調和型農産物の直接取引・販売を開始しました。

■ 今後の展開と「ぎふラル」の普及促進

今後は、環境にやさしい農業の理解促進を図るとともに、「ぎふラル」など環境調和型農産物の魅力を広く発信し、販路拡大とともに持続可能な地域農業の確立を目指します。

コープぎふとの取組み

2025年度　新規採用職員合同研修

■開催目的は、相互組織の理解、連携の基盤形成。農家交流・実態把握、職員の商品説明力向上。これらを目指し、継続的な活動をすすめる。

参加者コメント

・同じ目的を持った協同組合の仲間ができた。

・互いの強みを理解し、地域貢献につなげたい。

コープぎふとの取組み

岐阜いちご部会　西垣さんとの交流

■ なぜこの視察交流会を？

　コープぎふの組合員さんが、生産者の想いにふれながら、いちごが育つ現場を見て、地域農業への理解を深めることが目的です。
　今回は、「JA ぎふのいちご」としてのブランド化や、今後の取り組みのきっかけづくりとして実施しました。

■ 参加者の声

　当日は、JA ぎふからのご説明をいただいたあと、西垣さんのハウスを見学。

・いちごづくりの工夫やご苦労を伺い、包装機の実演や収穫体験も行いました。
・生産者の方と直接話すことで、参加者の皆さんからは「もっと話が聞きたい！」という声もあがりました。

■ これからに向けて

　今後もこうした交流を通じて、コープ組合員のみなさんに地域農業への理解を深めていただけるよう取り組んでまいります。
　「ＪＡぎふのいちご」としてのブランドづくりを進めるとともに、他の地元農産物への展開や、コープぎふとの連携による新たな企画・活動につなげていきたいと考えています。

■ 広報でも紹介！

この様子は コープぎふの広報誌『ニッシー』でも紹介されました。組合員さんにも、現場の雰囲気や交流のあたたかさが伝わる内容となっています。

コープぎふとの取組み

山県ばすけっとコラボ企画

■ 理事長自ら訪問・視察

コープぎふ根崎理事長が山県ばすけっとを訪問。何ができるか打合せスタート。

左：店長　中：　右：

◆取　組　概　要

第1弾（6月実施済）

コープぎふ西支所の商品カタログ配布先13,500件に「山県ばすけっと」PRチラシを同封。

第2弾（7月実施済）

山県ばすけっと周年祭にコープのキッチンカーが出店。周年祭チラシも配布。

第3弾（今秋予定）

「栗フェア」でコープぎふの栗関連商品を同時販売し、賑わいづくりを図る。

第2弾　山県ばすけっと周年祭の様子

■ 短冊に願い事

山県ばすけっと夏の風物詩、笹に親子が願いを結んでいます。

■ キッチンカー登場

周年祭に合わせて、山県ばすけっとでコープのキッチンカーを出店いただきました。

■ ＪＡめぐみの参戦

ＪＡめぐみのフランクフルトも登場し、ＪＡぎふ×コープぎふ×ＪＡめぐみのがコラボ

コープぎふとの取組み

ぷらざ・支店での「グループ」結成

令和７年６月末現在

利用支店・プラザ	利用日時	登録者数
川島支店	毎週 木曜日　15時	１３名
ぷらざ常磐	毎週 木曜日　15時	６名
ぷらざ大桜	毎週 金曜日　10時45分	１０名
合　計		２９名

【利用者のご意見】
- 「1カ月前に妻が亡くなり、食事に困っていた。息子にも心配かけたくない。これなら俺一人でもできそうだ。ここなら歩いてこれるし、助かる。」80代男性
- 「友達がどんどん亡くなっていてさみしい。足も悪くなってお気に入りの喫茶店も階段があるので行けない。ここの仲間と会って話すのが楽しみ。」90代女性

■状況の報告

JAぎふとコープぎふとの連携により、コープぎふの「グループ（班）」をJAの支店（ぷらざ）内に結成し、利用を開始しました。現在、グループによる利用はおおむね順調に推移しており、組合員の利便性向上や地域へのサービス拡充に寄与しています。

■今後の展開

1. 利用エリアの段階的拡大
   今後は、現在のグループ利用の成果を踏まえ、他のJAぷらざや支店へ順次拡大していきます。これにより、地域住民への接点をさらに強化し、事業利用の裾野を広げます。
2. セミナー・イベントの共同開催
   グループ利用日にあわせ、JAとコープ双方の組合員を対象としたセミナーやイベント（例：試食会・健康相談・農と食に関する講座等）を開催します。
3. 組合員加入促進と共通組合員化の推進
   上記の取り組みを通じて、JA・コープ両組織への組合員加入を促進し、将来的には「共通組合員化（＝双方の組合員としての一体的な位置づけ）」をめざした基盤づくりを進めます。これにより、地域住民がより多角的に事業を利用できる環境を整備し、持続可能な地域社会の形成に資することを目標とします。

コープぎふとの取組み

「くらしに役立つ“つながり”づくり講座」～JA・コープのいいとこ取り体験～

１．企画目的
・JA組合員とコープぎふ組合員の交流促進
・共通組合員登録の動機づけ
・相互事業（サービス）利用の促進
・グループ活動を基盤とした地域連携強化と“顔が見える関係”づくり

２．開催概要（全３回）

回	日程	会場	主な内容
第１回	令和7年9月11日(木) 10時～12時	ぷらざ大桜	防災マップづくり＋防災食試食
第２回	令和7年11月27日(木) 10時～12時	コープぎふ 訪問介護ステーション長良	食の安全講座＋試食 （添加物・農薬・放射能）
第３回	令和8年1月29日(木) 10時～12時	ぷらざ大桜	恵方巻作り講座

・参加人数　各講座20名（ＪＡぎふ組合員10名、コープぎふ組合員10名）

３．将来展望
・組合員が互いの価値を知る機会とし、地域協同組合モデルの深化へつなげる
・デジタル組合員証なども紹介し、未加入者へのアプローチ強化
・相互事業の紹介・利用の場とする

コープぎふとの取組み

第１回プラザ大桜　防災講座「くらしに役立つつながりづくりセミナー」

◆概要

目的　地域のみんなに役立つ情報と交流の場づくり。
今回は「防災」をテーマに、**学んで・試して・話せる場**にしました。

内容　クイズで楽しく防災チェック
持ち出し袋の中身をみんなで確認
非常食を味見（「じゃがりこポテト」大好評！）
グッズづくりを体験

意義　防災の大事さをあらためて実感
JAとコープの組合員が顔を合わせてつながれた
交流から事業の利用や加入にもつながる

◆結果

参加　**JAぎふ組合員：1名　コープぎふ組合員：6名**
双方の組合員：11名

成果　コープグループ加入希望が3名！交流が深まり「一緒にやろう」という空気が生まれた

参加者の声

「身近で分かりやすかった」
「定期的にやってほしい」
「今日の学びをすぐ実践します」
「地域の防災マップづくりに役立つ」
「非常食、家族にも紹介したい」

◆今後

次回予定

川島支店やプラザ常磐、プラザ日野、プラザ方県でも開催予定！

これからの課題

・もっと広報して、参加の輪を広げたい
・防災以外にも、くらしに役立つテーマで続けていきたい
・組合員加入促進につなげる

国際協同組合年

協同組合はよりよい世界を築きます

©UN

プラザ大桜で実施するコープ連携の第2回〖食の安全講座〗が
「国際協同組合年事業」として認定を受けました

▶ 国際共同組合年

・国連は2025年を2012年に続き2回目の
「国際協同組合年(International Year of Cooperatives)」 と定められました。

・協同組合の価値や貢献を広く社会に伝え、各国での協同組合運動の発展を促すことを目的にしています。

▶ 日本における「事業認定」とは

日本では「国際協同組合年全国実行委員会」が組織され、各地で取り組まれる記念事業やイベントを「国際協同組合年事業」として認定する制度を設けました。

認定を受けることで、

・「国際協同組合年」の公式ロゴやスローガンを使用できる

・全国実行委員会の広報媒体に掲載される

・全国的な取り組みの一環として位置づけられるなどのメリットがあります。

2025 年 9 月 17 日

ぎふ農業協同組合
生活協同組合コープぎふ　御中

2025 国際協同組合年全国実行委員会認定事業
審査結果のお知らせ

2025 国際協同組合年全国実行委員会

拝啓

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび申請いただきました 2025 国際協同組合年全国実行委員会認定事業申請『「くらしに役立つ"つながり"づくり講座」～ＪＡ・コープのいいところ取り体験～　第２回「食の安全講座」』につきましては、審査の結果、認定事業として決定されましたのでご連絡申し上げます。

本決定により、次の対応が可能となりますので、ご活用ください。

- 事業の広報媒体等に「2025 国際協同組合年事業」(あるいは「2025 国際協同組合年全国実行委員会認定事業」)または「IYC2025 事業」(あるいは「IYC2025 全国実行委員会認定事業」)と表示
- 国連が発表した 2025 国際協同組合年ロゴの日本語版の使用
  ※ロゴ使用に際しては「2025 国際協同組合年ロゴ（日本語版）使用にあたっての留意事項」をご確認、データをダウンロードのうえご使用ください。
  ⇒2025 国際協同組合年ロゴの日本語版が決まりました｜日本協同組合連携機構（JCA）

ご申請いただきました講座のご成功を、心よりお祈り申し上げます。

敬具

コープ連携 関連記事

生協女性会員と交流
組織活動の輪広げる

JAぎふ女性部川島支部

生協の活動について説明を聞く参加者ら

【ぎふ】JAぎふ女性部川島支部は、「女性部サロン」に生活協同組合コープぎふの女性会員を招いて交流を深めた。会場はJA川島支店。JA女性部員と生協の女性会員との交流は初めて。

サロンは、JA女性部員が2カ月に1回、年金受給日に合わせて、飲み物の提供や地元産野菜などの販売を行う取り組みだ。

この日は、生協の女性会員と職員の計8人が参加し、JA女性部員やJA職員ら12人と組織活動や今後の連携について意見を交わした。生協の参加者が取り扱う商品を紹介し、参加者で「卵スープ」を試食した。

JA女性部員の小関多津子さんは「生協の活動と消費者の思いを知れた。今後も交流を重ね、生産者の思いや地域住民の声を伝えていきたい」と話した。

JA川島支店の前原崇支店長は「女性ならではの輪を広げることから、消費者と生産者の相互理解につながることを期待したい」と将来を見据えた。同JAと同生協は、地域の暮らしと地域農業を守ることを目的として2024年2月に包括連携協定を締結し、協力体制を進めている。JAは、消費者と生産者の交流の輪を広げ、相互理解を深める考えだ。

生協店舗のブースで地場産農産物を販売
JAぎふとコープぎふ

【ぎふ】JAぎふと生協のコープぎふは、協同組合間連携の一環で、岐阜市のコープ芥見店内に、JAの地場産農産物販売ブースを設置した。直売所より営業時間の長いコープ店舗で販売することで、消費者のニーズに応えるとともに販売拡大につなげる。

「JAぎふおんさい広場芥見」と名付けた20平方㍍のブースを今月から設置した。同店の営業時間は、午前10時～午後8時（土・日曜日は午前9時30分～午後8時）。

芥見地区の農産物を手に協同組合間連携をPRする大坪理事長㊨と岩佐組合長（岐阜市で）

芥見地区の農家が出荷する直売所「JAぎふおんさい朝市芥見」の営業時間は午前9時～午後3時で、夕方の買い物ニーズには対応できていなかった。

ブース設置に合わせてJAの岩佐哲司組合長と同生協の大坪光樹理事長が同店を訪れた。

岩佐組合長は「JAとコープの連携が農業所得の向上や農業振興につながっていく」と期待を込めた。

豊かな暮らしへ協定
JAぎふ コープぎふ

【ぎふ】コープぎふとJAぎふは2月下旬、各務原市のコープぎふ本部で「豊かでくらしやすい地域社会づくり」に向けた包括連携協定の締結式を行った。

2023年3月には岐阜市の同生協芥見店に「JAぎふおんさい広場芥見」の販売ブースを設置。利用者からは「地元の農産物を購入できるのはうれしい」と好評だ。これを受けて、互いの強みを生かした一層の連携を目指し、今回の協定締結となった。

協定書を持つ大坪理事長㊨と岩佐組合長

両者は今後①健康で豊かなくらしに寄与する地域づくり、街づくり②消費者と生産者を結びつける地消地産の基盤づくり③食の安全・安心供給から地域の食料自給率向上④相互の人材教育・人的交流⑤本協定の趣旨に賛同する他の協同組合組織等の参画促進――の五つの協力事項を踏まえ、販売、流通、イベントなどを検討していく。

この日は、コープぎふの大坪光樹理事長と同JAの岩佐哲司組合長が協定書に署名した。大坪理事長は「JAぎふと連携協定を結んだことで、組合員に地元農産物を提供できるのはうれしい」と話した。

岩佐組合長は「豊かでくらしやすい地域社会を目指し、両組合員のためとなる事業展開を進めていく」と今後の協同組合間連携に期待を込めた。

コープ連携 関連記事

タノモット 宅配ブランド始動

東海3生協 若年層へ事業拡大

東海3県（岐阜・愛知・三重）の生協が12日、新たな宅配統一ブランド「タノモット」を始動した。それぞれの地域のJAが農産物を供給し、ブランドを支える。参加する生協は、コープぎふ、コープあいち、コープみえで、若年層への宅配事業の拡大を目指す。JAにとって新ブランドは、地場の農産物の認知向上が期待される。

JAが農産物供給

岐阜県各務原市では新ブランドのデザイントラックを披露し、出発式を催した。コープぎふの根崎周一理事長は「名称には宅配をもっと楽しく、頼もしくとのメッセージを添えた」と説明。新ブランドは、年間事業規模980億円、組合員約85万人を対象にした、東海エリア最大級の宅配サービスとなる。

コープぎふと包括連携協定を結ぶJAぎふは、「消費者の視点を取り入れたJA独自の農産物栽培基準『ぎふラル』認証の野菜を新ブランドで宅配したい」とし、JA産の農産物への購入拡大を期待する。コープあいちはこれまでに、JAあいち知多のトウモロコシ、JAあいち三河やJAひまわりなどの野菜を、コープみえはJA多気郡のミカンを扱っている。コープぎふの児玉幸夫専務は「新ブランドを通じ、JAと共に生協組合員と生産者をつなぎ、組合員が安心して農産物を購入する環境づくりを進めたい」と話し、地消地産を進める考えを示した。（中村元則）

新しい宅配ブランド「タノモット」のトラックに積み込まれるJAぎふの農産物（12日、岐阜県各務原市で）

直売所4周年を祝う

JAぎふ山県 ばすけっと 感謝込め祭でもてなし

【ぎふ】山県市のJAぎふ「山県ばすけっと」は、オープンから4周年を迎えた。7月上旬の2日間、日頃の感謝を込めた周年祭を開いた。

エダマメの詰め放題や「シャインマスカット」あめなどを特別販売した他、初日には、連携協定を結ぶコープぎふのキッチンカーが出店。冷やし白玉ぜんざいやアイスコーヒーを販売した。

目玉企画として、山県ばすけっと専用に同市内の農家が栽培した糖度20超のトウモロコシ「おおもの」の生産直売を行った。また、地元特産のニンニクを使用したプライベートブランド（PB）商品「ガリガリガーリックラスク」の販売も行われた。さらに、店舗内にある食事処「山県ごはん」では、旬のトウモロコシやナスを使った天ぷらお膳を提供。小学生以下を対象にした水風船釣りも行われ、多くの家族連れでにぎわった。

店長の山口貴寛さんは「周年だいた地感謝を伝も地域の共に、喜くりを目い」と新

同施設品や食事体で楽型の施設れており2023年から2023での累計万人を超

七夕飾りに願いを込める来店者

コープ商品をグループ購入

JAぎふと生協が連携

【ぎふ】コープぎふと連携協定を結ぶJAぎふは、ふれあいプラザ大桜と常磐、川島支店の3店舗で、コープ商品の共同購入システム「グループ購入」の試験導入を始めた。利用するのはJAの組合員で、複数人がまとめて商品を購入する。この仕組みの導入で、買い物の利便性が高まっただけでなく、組合員が店舗を訪れるきっかけが生まれ、組合員同士の交流にもつながった。

JA店舗で受け取り

商品は毎週、決まった曜日の指定時間に店舗に届く。利用者は、到着時間の後に来店し、自分たちで商品を分け合って受け取る。次週の注文は、受け取り時に紙の注文書で記入するか、スマートフォンを通じて行う。

利用者からは「妻を亡くし、食事に困っていたが、これなら一人でもなんとかなる」「買い物ついでにJAで仲間と会話できるのがうれしい」といった声が上がっている。

この仕組みでは、生協とJAの共通組合員化や、それぞれの事業の利用促進といった効果が期待される。今後は、地域住民にも参加を呼びかけ、JAの理解者やつながりを広げていく計画だ。

ふれあいプラザ常磐の長屋研二プラザ長は「グループ購入は、組合員が自然と店舗に集まるきっかけになる良い仕組み。職員は、商品の仕分け作業をしないので負担はない」と話した。

ふれあいプラザ常磐に商品を納品するコープ職員

高齢者支援 一体的に

JAぎふ、コープぎふなど 事例学ぶ

志村管理者㊨から介護保険制度を学ぶJA職員ら

【ぎふ】JAぎふと一般社団法人JA成年後見センターぎふ、生活協同組合コープぎふは、介護保険についての学習会を開いた。会場は、コープぎふが運営するケアプランセンター長良虹の家。ケアマネジャーと成年後見人が相互理解を深め、両者の専門性を生かした高齢者支援を目指そうとする取り組みだ。

講師は、コープぎふのケアプランセンター長良の志村時子管理者と、ケアプランセンター各務原の長島豊管理者が務めた。志村管理者は、介護保険制度の概要と利用方法を説明。長島管理者は、利用者の能力に応じた自立支援や家族への必要なサポートについて、事例を交えて紹介した。

参加者からは「利用者ごとにケアプランを組み立てることで、尊厳を保てることが分かった」「互いに協力して地域の課題を解決していきたい」といった声が上がっていた。

この取り組みは、「高齢者支援連携プロジェクト」の一環。JA成年後見センターぎふとコープぎふの介護サービス事業が連携を深めることで、高齢者の生活支援体制を強化し、見守り・権利擁護・介護支援の一体化につなげる。

共に学ぶ〝協同の精神〟

JAぎふとコープぎふ 新入職員がチーム研修

一つの課題に協力して取り組むJA職員とコープ職員ら（岐阜県各務原市で）

【ぎふ】JAぎふとコープぎふは、両組織の新入職員を対象とした合同研修を初めて開いた。2024年に結んだ包括連携協定を踏まえた取り組み。協同組合としての共通の理念や、組織の枠を超えたつながりを育む場づくりとなった。

4月の2日間、各務原市のJA各務原中央営業所での研修に参加した新入職員は、チームワークやチームメンバー個々の成長を目指し、良いチームをつくるチームビルディング研修を通じて協同の本質や人と人とのつながりの大切さを体感。協力し合って課題に取り組むことで、自らの価値観や考えを共有し、実践的なコミュニケーション力や他者理解、信頼関係の構築について学びを深めた。

参加者は「互いの組織を理解し、根本的には組合員を支える考え方は同じだった」「今後の仕事でも、協力しながら地域を支えていきたい」など、前向きな声が多く出た。

包括連携協定締結後、両組合は協同組合という共通の土台を基に、連携を深めた取り組みを進めている。今回の研修は、協同の精神を新たに学ぶ場として企画した。

合同での農業体験研修なども予定する。両組織は継続的な学びと交流を通して、地域に根差す協同組合職員としての成長と絆の深化を期待している。

エダマメの植え付け方法を教わるJAと生協の新採用職員

新採用職員に農業研修

JAぎふ×コープぎふ 農家の苦労実感

エダマメ作業支え合う

【ぎふ】JAぎふとコープぎふは、笠松町で新採用職員を対象とした合同農業体験研修に取り組んでいる。2024年2月の包括連携協定に基づく取り組み。協同組合の職員としての資質向上や、JAと生協の連携基盤強化を図る狙いだ。5月下旬には、エダマメ苗の植え付けや防虫ネットの設置を体験した。

研修は、地域の女性農業者グループ「GKB48・8（岐南・かわいい・ばぁちゃん、4人で8人分働く）」が栽培するエダマメを題材に、定植から収穫、JAや同生協の店舗での販売までを体験するもの。当日は、グループ代表の小関和代さんが作業内容を説明。参加者は、声をかけ合い、サポートしながら農作業に取り組んだ。

生協職員は「研修で農家の苦労を実感できた。農産物を提案するときには、生産の背景や農家の思いも伝えられるようにしたい」と研修を振り返った。JAの職員は「生協とJAは業務内容が異なるが、研修では互いに支え合いながら、一つのチームのように連携して取り組めた。他の活動でも一緒に取り組んでいきたい」と話した。

この研修は、本年度から継続的なカリキュラムとしてスタート。今後も定期的に実施する。実地体験に加え、座学研修も組み合わせる。地域とつながり、地域を支える人材を育てる第一歩とする。

コープ連携 関連記事

イチゴ農家の思いを実感

委員にイチゴを説明する西垣さん㊨

【ぎふ】JAぎふとコープぎふは5月上旬、岐阜市内のイチゴ農家のハウスで、生産現場での交流視察を催した。同生協の岐阜西支所のエリア委員5人をはじめ、コープ職員やJA関係者ら計11人が参加。生産者との意見交換や収穫体験を通じ、地域農業へ理解を深めた。協同組合が連携した取り組みだ。

この日は、西垣忍さんのビニールハウスで交流した。西垣さんは、栽培の工夫や環境制御の取り組みについて「空調管理や炭酸ガスの施用、マルハナバチの導入などを通じて品質の安定を図っている」と説明。生協の委員は、農薬の使用基準や労力のかかる作業などについて質問をし、熱心に意見を交わした。イチゴの半自動包装機の実演や収穫体験も行った。JAの黒野流通センターにあるいちごパッキングセンターも見学した。

参加した委員は「店舗に並ぶまでの背景にある努力を知って価値の見え方が変わった」「今後は生産者の顔を思い浮かべながら食べたい」などと話していた。生協職員は「生産者を生協の組合員の集まりに招き、イチゴの魅力を語ってもらう場を設けたい」と提案をしていた。

西垣さんは「交流視察を通じて、生産者が取り組んでいる安全で安心できるイチゴ栽培の取り組みを知ってもらう良い機会になった」と語った。

JAは、「JAぎふのいちご」のブランド化、同生協との直接取引を視野に入れた取り組みを検討している。

JAぎふと生協が連携

岐阜県協同組合間提携推進協
店舗づくり連携学ぶ

コープぎふ芥見店を視察する参加者ら

2025 国際協同組合年

岐阜県協同組合間提携推進協議会は10日、岐阜市内で「協同組合に関する学習会」を開いた。生協やJAなど職員16人が参加した。

参加者は、コープぎふ芥見店の大月貴宏店長から店舗コンセプト・目指す店舗像や、来店客の意見などを店舗運営に活用する「スマイルシート」の取り組みについて説明を受けた。そして、店内に常設しているJAぎふおんさい広場芥見の販売ブースを中心に視察した。また、日本協同組合連携機構の澤田雅仁連携推進マネジャーを講師に、2025国際協同組合年に関する講義・グループワークを行った。

澤田マネジャーは、国際協同組合年の意義や協同組合として目指す姿を紹介した。その上で「今年は協同組合同士の連携がより一層求められる。どのような連携ができるか考えることが大切」と参加者らに呼びかけた。

その後、参加者は「2025国際協同組合年を起点に協同間で連携できること」というテーマでグループワークを行った。参加者からは、若い世代が協同組合について知る機会を増やす計画や各協同組合が合同で情報発信を行う案が上がった。

参加者からは「各組織の視点から問題や課題を挙げ、連携できる取り組みについて考えることができ、貴重な体験となった」などの感想が寄せられた。

コープ連携 関連記事

原料に規格外 農福連携商品
濃厚「枝豆からし豆腐」

JAぎふ×弓削銘水堂が販売

「枝豆からし豆腐」を試食する子ども

【ぎふ】JAぎふと豆腐メーカーの弓削銘水堂は共同で「枝豆からし豆腐」を開発し、22日からコープぎふ芥見店で販売を始めた。初日の22日は、試食販売も行い、多くの来店者が「枝豆からし豆腐」を楽しんでいた。

商品の原料には、JAの選果場で発生した規格外エダマメを使った。障害者福祉施設が加工（むき・クラッシュ・ペースト）をした農福連携の商品でもある。大豆は、同社がある揖斐川町産を使用するなど県産にこだわった。

同社の弓削智裕社長は「JAと半年間にわたって試作を重ね、エダマメと豆腐の調和が取れた商品に仕上がった。障害者支援にもつながる」と語った。

試食をした消費者は「濃厚な豆腐とエダマメの食感がマッチしておいしい」「アイデアが新鮮な商品だ」「家族にも食べてもらいたい」などと感想を述べていた。

商品は、同店とJA産直店舗「おんさい広場」（鷺山・はぐり・真正）、糸貫農産物販売所、KOME米HOUSE本荘店、山県ばすけっと。7月1日からは、コープぎふ長良店でも販売する。

コープ連携 関連記事

協同組合連携さらに

JAぎふ×コープぎふ

関係づくりに防災講座

【ぎふ】JAぎふとコープぎふは9月中旬、包括連携協定に基づき、防災をテーマに「くらしに役立つ、つながりづくりセミナー」を開いた。会場はJAふれあいプラザ大桜。JA組合員と生協組合員の計21人が参加し、防災意識を高めた。

講師は、コープぎふ副理事長の堀部智子さんと、くらしの活動パートナーの近松香代さんの2人の防災士が務めた。セミナーでは、楽しんで体験学習することを軸に、防災クイズ、非常用持ち出し袋の中身を考えるワーク、ローリングストック法の紹介と試食、新聞紙で作るスリッパや牛乳パックで作る笛などの防災グッズ製作に取り組んだ。堀部さんは「防災は、まず自分の身を守ることが大切。日頃から家族で話題にして、近所付き合いを大事にしてほしい」と呼びかけた。

参加者は「知らない情報が多く勉強になった」「学んだことを早速実践したい」などと感想を述べていた。

会場ではセミナーが終わった後も、組合員同士で情報交換する姿が見られ、顔の見える関係づくりのきっかけとなった。

今回の参加者には、JAと生協の両方に加入する組合員が多く、共通組合員化を通じた相互の事業利用につながる可能性も確認できた。コープグループへの加入希望者が3人あった。

同プラザの中村喜代美プラザ長は「防災は日頃の備えがとても重要。生協と連携し、組合員に情報提供ができた。今後も、ありがとうと言ってもらえる活動を続けたい。共通の組合員が多いことを強みに、今後は相互事業利用をさらに広げていきたい」と述べた。

堀部さんから災害時のスリッパ作りを教わる参加者

包括協定で新体制キックオフ会議

【ぎふ】JAぎふとコープぎふは、包括連携協定に基づく活動の発展に向け、JA本店で新体制のキックオフ会議を開いた。JAと生協の役職員計33人が参加。昨年2月に結んだ協定の目的である「豊かで暮らしやすい地域社会づくり」と、目指す姿である「食の安全・安心、地域農業の振興、消費者と生産者の結び付きの強化」を改めて確認した。

両協同組合はこれまでに、農産物の直接取引やイベントの共催、食農教育活動など13項目について連携して取り組む。今後は、共通組合員制度の構築、地域循環型事業の推進など9項目を予定する。

会議では、活動の第1ステージとして、消費者と農業者をつなぐ活動を多彩に展開してきたと紹介。生協店舗でのJA産野菜の販売企画や、地域特産「岐阜えだまめ」をテーマにした料理教室は、組合員間の交流と地域農業の理解促進に大きく寄与したとした。

第2ステージでは、主要な活動ごとにJAと生協の混成チームをつくって取り組む。相互の強みを生かし、地域課題に対応する。

JAの岩佐哲司組合長は「消費者にもフォーカスし、地域と一緒に農業者を守っていく」と方向性を示し、地域住民との協働の重要性を強調。生協の児玉幸雄専務は「地域課題の解決に向けて連携し、魅力ある地域づくりに貢献する」と、連携への期待を示した。

JAの近藤隆郎専務は「豊かな地域社会の実現に向け、担当者はしっかりと取り組んでほしい」と参加者に呼びかけた。

参加者に今後の方針を伝える岩佐組合長（左から2人目）と児玉専務（同3人目）ら

コープ連携 関連記事

組織越えて若手研修

JA ぎふ コープぎふなど 歩行ラリーで解決力

【ぎふ】JAぎふ、生活協同組合コープぎふ、内堀醸造は10月上旬の2日間、各務原市で若手職員を対象にした「歩行ラリー研修」を開いた。3組織の合同研修は初めて。約30人が参加し、課題解決力やチームワークの向上を図った。

この研修は、参加者を「プレーヤー」と「後方メンバー」に分けて実施する。プレーヤーは、制限時間の中で資料を基に順路を導き出し、協力しながら完走を目指す。後方メンバーは、直接の指示を行わず、気付きを促しながら成長を支援する役割を担う。

資料から順路を導き出し、ゴールにたどり着いたプレーヤー

参加者は「初めは戸惑ったけれど、仲間と連携し完走できた」「分かったつもりで進めるのではなく、立ち止まって考え、共有することの大切さを実感した」「気付きを促すのは難しいと実感した」といった声が上がっていた。

同生協の水野琢史執行役員は「初日の様子で難しい研修だと思ったが、最後には全員が完走できた。この経験を、今後の業務に役立ててほしい」と述べた。同JA人事労務課の担当者は「組織の枠を越えて課題に取り組む経験は、若手職員にとって大きな財産となる。今後も、地域の仲間と連携しながら学ぶ機会を広げていきたい」と話した。

岐阜えだまめで料理

JAぎふと生協 親子と交流会

【ぎふ】JAぎふは、連携協定を結ぶコープぎふが主催の親子料理交流会に共催し、特産「岐阜えだまめ」の魅力や栽培方法、調理の工夫などを紹介した。会場は岐阜市西部コミュニティセンターで、抽選で選ばれた8組16人が参加した。

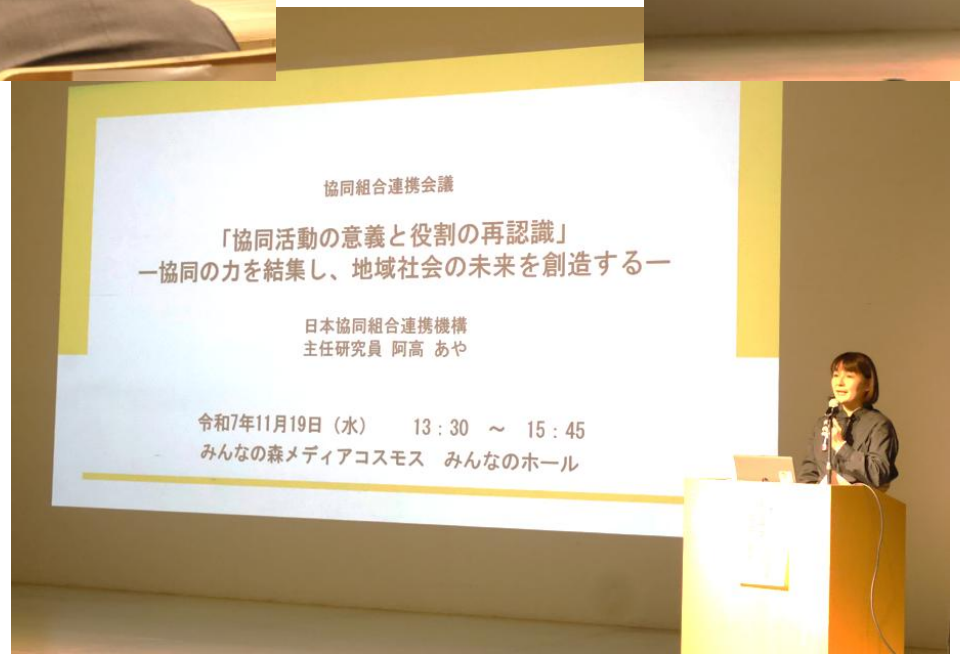
参加者と一緒に枝豆ギョーザを作る農業者の栗本さん（右から3人目）

講師は、JA黒野農産物流通センターの鷲見将志さんと農業者3人が務めた。鷲見さんは、動画を活用し、「岐阜えだまめ」の栽培方法や収穫後の選別工程を解説。農業者の栗本和弥さんは、防虫ネットの使用や三段階の選別など、他産地との差別化の工夫を紹介した。参加者は「岐阜えだまめのことを深く知って、より好きになった」「ゆでる以外のレパートリーが増えた」といった感想を寄せていた。

この取り組みは、生協が進める「食と農を体感するプロジェクト」の一環。これまでは農場で収穫体験を行ってきたが、今回は熱中症を防ぐため屋内での料理交流会とした。

農業者の市川貴文さんは「参加した親子から直接、『楽しかった』『おいしかった』との感想をもらい、励みになった。岐阜えだまめの魅力をこれからも発信していきたい」と話した。

協同組合連携会議



2025.11.19
みんなの森
ぎふメディアコスモス
～みんなのホール～

協同組合連携会議

1．あいさつ　岩佐JAぎふ組合長　根崎コープぎふ理事長

2．基調講演　日本協同組合連携機構 阿高 あや主任研究員
「協同活動の意義と役割の再認識」**協同の力を結集し、地域社会の未来を創造する**

3．報告会　包括連携協定について

4．意見交換会　各専門チームによる
・これまでの活動についての振りかえり・これからの活動についての意見交換
・将来取り組みたい活動などのアイデアの共有

みのっ太

【開催目的】

8月の「キックオフ会議」で報告した７つの専門チームとコープぎふとの具体的な取り組みについて

①本店部課長および未取り組みの支店・プラザの所属長、コープぎふの上層部への周知

②協同活動への理解深化： 参加したメンバーの協同活動の意義について理解を醸成する

③専門チームメンバー間の連携意識の醸成

④事例の学習と応用：この連携をより多くの店舗に拡大し、一層**促進・充実**させ活動の輪を広げる

協同組合連携会議　参加者へのアンケート結果①

協同組合同士なので連携は馴染みやすいと思います。ただ私自身も生協さんがどんな活動をしてどんな強みがあるのか知識がないので深める必要があると感じました。既に連携活動がスタートしていただいている方達の意見を参考に取り組んでいきたいです。
地域の消費者に野菜などを提供する場が広がることと、その消費者と生産者が近くなるため、重要な取り組みだと感じました。
地域の組織がしっかりタッグを組み、地域を盛り上げて行くためには重要なことだと感じています!!
お互いの強みを活かす、弱みを相互補完していくことが我々のめざす姿「活力ある農業と豊かな地域社会の実現」に繋がると改めて感じました。
コープとの連携を強化し、生産者と消費者のウィンウィンの関係を構築・発展させることが、JAの役割であると感じました。
協同組合同士なので連携は馴染みやすいと思います。ただ私自身も生協さんがどんな活動をしてどんな強みがあるのか知識がないので深める必要があると感じました。既に連携活動がスタートしていただいている方達の意見を参考に取り組んでいきたいです。
地域の人・組織が協同し、豊かな地域社会を実現する。まさに、協同組合の理念そのものです。 研修全体を通して2つの組織から、さらに輪を拡げていく意識を持ち、取り組んでいく必要性を確認しました。
コープの概念は地産地消でJAぎふは地消地産であると認識していますが、お互いの得意分野を活かすためには消費のスペシャリストであるコープさんと生産のスペシャリストであるJAがタッグを組むのはとても良い事だと感じました。地産地消の進化系が地消地産だと思いますので、実現できるよう、コープさんからの情報提供も重要になってくるのではと思います。

協同組合連携会議　参加者へのアンケート結果②

消費者ニーズに応える事は必要でありますが、JAとして組合員ニーズを集め、それに応えれているのかが疑問だと感じました
持続可能な施策、継続可能な連携方針が必要かと考えます。
消費者ニーズが多様化している中で、農業の課題は多いと感じる。互いの情報を共有し合える点において、強みを感じ、今後の具体的な活動に期待したい。
職員個々が深く理解せるには時間が必要だとも思いました。
消費者のニーズに応え続けるのはなかなか容易なことではないと感じる。しかし、可能な限りの努力は必要であり、これからも組合員に喜んでいただけるJAを目指していきたい。農家の方にもその考えを理解していただき、魅力ある地域になると良いと思う。
生協の組合員がJAの施設を使い、協同を活動行う事に違和感を感じています。
プラザやコミュニティ店舗で、生協のグループ購入を行う事は支店の活性化につながっていいますが、ほかにも生協の活動がJAにメリットがあるのでしょうか？
JAの組合員は生協の組合員になりグループ購入をしています。生協の利用者は増えましたが、本当に生協の組合員はJAの組合員加入や事業利用をしてもらえるのでしょうか？
将来、JAと生協は1つの協同組合になるの？

JAぎふ×コープぎふ　連携の効果

No.	項目	期待と効果
1	コープ芥見店「JAぎふおんさい広場芥見」販売ブース設置	地消地産の促進、おんさい朝市の代替機能、**生産者の販路確保**
2	コープ長良店で環境調和型農産物の直接取引・販売	環境意識の向上、持続可能な農業の啓発、**農産物単価向上**
3	JA開発商品（枝豆からし豆腐）のコープ宅配・店舗販売	商品力強化、消費者の声を反映した6次産業化の推進
4	コープぎふ虹の会(取引業者の会)加入	業者×農家マッチングによる販促、収益向上、**JAの経営サポートを通じた事業利用**
5	新採用職員合同研修	組織間理解の深化、**将来的な連携の基盤形成**
6	新採用職員合同農家実習	農業現場への理解促進、職員の商品説明力向上
7	コープ組合員と農家の交流会	食の安全への理解促進、**購買意欲の向上**
8	女性部とエリア委員の交流	女性リーダーの連携、地域活動の活性化
9	プラザ・支店での「グループ」活動	組合員接点の拡大、サービス一体提供、モデル形成、**総合事業利用の促進**
10	弁当・惣菜工場の創業	**農産物の安定供給先確保**、地域循環モデル創出
11	食と農の連携推進フォーラム参加	消費者の意見集約、「ぎふラル」の周知
12	広報連携（チラシ・Web等）	相互理解と参加促進、取り組みの可視化

JAぎふ×コープぎふ　今後の取り組み

・今後の取り組みについては、以下の構想を参考に各専門チームが協議し、項目を企画していきます。
・各チームの企画がまとまり次第、報告します。

No.	項目	効果
1	コープ店舗にぎふラル農産物専用コーナー設置	地消地産・環境意識の促進、**農産物ブランド化**
2	コープ商品として「ぎふラル農産物」宅配	**販路拡大**、消費者への継続的な価値提供
3	ＪAぎふのイチゴ・枝豆等の直接取引	新鮮な供給体制、生産者収益向上、組合員満足
4	山県ばすけっとへの集客誘導	知名度向上、**来店者層の拡大**
5	コープステーション設置（ＪＡ支店敷地内）	サービス一体提供、利便性向上、**相互事業利用の促進**
6	組合員合同企画・イベントの開催	組合員の参加促進、地域の課題解決
7	共通組合員制度の構築	利便性向上、**相互事業利用の促進**
8	社会人インターンシップ制度構築	職員育成（相互組織理解、視野拡大等）
9	広報連携の発展（訪問時の周知）	相互利用のPR、**利用誘導**
10	連携取組の内・外部発信	認知度向上、**事業利用**、組合活動参加促進

JAぎふ×コープぎふ　総括

1．協定締結の背景と目的

ＪＡぎふと生活協同組合コープぎふは、共に「協同組合」として地域に根ざした事業活動を展開し**食と農を通じて豊かでくらしやすい地域社会を築く**という理念を共有しています。
この共通の理念のもと、令和６年２月に「包括連携協定」を締結しました。

協定の目的は
・食の安全・安心の確保　・地域農業の振興
・消費者と生産者の結びつきの強化　・地域福祉・環境活動の推進
の４つを柱に、**相互の強みを活かした持続可能な地域づくり**を進めることにあります。

2．連携の意義

本協定は、単なる事業提携ではなく、**「協同組合間連携（Co-op to Co-op）」の実践**として位置づけられています。
組合員一人ひとりのくらしを支え、地域に必要とされる組織であり続けるため、
・ＪＡぎふが持つ「地域農業の基盤・生産力」
・コープぎふが持つ「生活者視点・購買ネットワーク」
を掛け合わせ、**“農”と“くらし”をつなぐ協働モデル**を構築していくことが狙いです。

JAぎふ×コープぎふ　総括

３．これまでの主な連携取組

No.	項目	内容	
1	合同商品開発	枝豆からし豆腐を共同開発し、コープで販売	1件
2	組合員交流	ＪＡ女性部×コープエリア委員　交流会開催。支店・プラザで合同セミナー開催等	4回
3	拠点づくり	3店舗（川島支店、プラザ大桜、プラザ常磐）にてコープグループ（班）を立ち上げ、地域の集まりの場を提供	3店舗
4	広報連携	ＪＡの「食と農の祭典」「ＪＡのいちご」「山県ばすけっと」のチラシ等をコープ組合員に周知等	4回
5	業者マッチング	虹の会（コープ取引業者の会）にＪＡが加入し、業者同士や組合員との事業マッチングを実施。	加入
6	人事交流	新採用職員の研修や農家実習の合同開催等	3回
7	商流の拡大	コープ店舗にて「おんさい出張コーナー」設置や業者を介さない直接取引開始を開始等	2店舗

４．今後の方向性

これまでの連携で得た成果を礎に、今後はさらに、

- **組合員の拡大**（JA・コープ双方の利用促進）
- **地域企業・行政との三者連携**（地消地産・防災・福祉分野での協働）
- **職員の相互理解と意識共有の深化**を進め、協同組合間連携の実践を地域全体に広げていきます。

５．まとめ

本協定は、**地域の「食」と「くらし」を支える両輪としての協同組合の新たな形**を示すものです。
JAぎふとコープぎふが互いの強みを活かし、地域の皆さまとともに「誰もが安心して暮らせる地域社会」の実現をめざしてまいります。

生協と農協は統合（合併）は可能か？（組合員からの質問）
生協と農協は、いずれも協同組合ですが、それぞれ根拠となる法律【生協（生活協同組合）：生活協同組合法　農協（農業協同組合）：農業協同組合法】が異なるため、法的に吸収合併は成立しません。
一般に、異なる根拠法を持つ法人格が、そのままの形で吸収合併することは想定されていません。
合併を行う場合は、原則として同じ法律に基づいて設立された組織同士である必要があります。

両組織が考える共通組合員とは？（組合員からの質問）
令和6年2月に締結した「コープぎふとJAぎふの包括連携協定」から1年以上が経過し、両組合はこれまで、農産物の直接取引をはじめ、新人合同研修、地域の支店・プラザを拠点とした交流活動など、多様な連携事業を展開してきました。
交流活動では、支店やプラザを起点としたグループ活動や合同セミナーなど、組合員同士の交流の場が少しずつ広がっています。
今後は、どちらか一方の組合に所属している方にも、もう一方の組合への加入を呼びかけ、両組合の事業をより身近に利用していただくことを目指します。
また、共通組合員の皆さんが主体となって企画する合同イベントや、共通組合員限定のセミナーなど、新しい形の活動も検討していきます。
共通組合員とは、あくまでJAぎふとコープぎふそれぞれの組合員資格を持つ方を指し、組合員や組織を一本化するものではありません。協同組合の目的である【組合員の生産（農）・くらしの向上と地域の向上（活性化）】の実現のため、両組合員の自主性を尊重しつつ、協同組合の強みである【人と人のつながり】を深めていく仕組みとして位置づけています。

今後の展開

☆地消地産をJAの産直施設と、生協の店舗が提携して地域内の食を発信します

・常設販売コーナーに、JAぎふが取り組む環境に配慮し栽培した農産物【通称：ぎふラル】の取引拡大

・加工品についても原材料の共有や企画段階からの連携を通じた商品づくり（単なる販売の重なりではない「共同開発」の取り組み）

☆【協同組合間協同】人材の育成（組織間連携）

・新規採用職員を対象とした合同研修や農家実習などを通た協同組合学習

・組織が一緒になり、包括連携を担う人材の育成

・将来それぞれの組織を担う立場となった際にも、自然にコミュニケーションを取り合い、組織の垣根を越えた連携や新たな企画や取り組みを生み出せる関係性と土台づくりを意識した人材育成に取り組みます

☆食べる人が「農」を、つくる人が「食」を学ぶ場としての機能発揮

両組合員が支店や、支店統廃合後のサテライト店舗である「ふれあいプラザ」で、防災や食、くらしをテーマとする講座や交流会を開催し、消費者が農業を、生産者が食を学び、お互いが「農のあるくらし」への関心を深めます

☆県内JAを巻き込んだ取り組み

コープぎふとの連携が岐阜県内の農協に広がっていくことで、単協同士が間接的につながり、学びや実践が県内全体へ波及していく、そうした「農協間を結ぶ協同」の広がりも期待できます

JAぎふ農産物独自栽培基準

ぎふラル Gifu Natural Farming

ＪＡぎふでは、消費者の皆さんが求める農産物を生産する「地消地産」に取り組んでいます。
「ぎふラル」は皆さんの声から生まれたJA独自の栽培基準です。

ワンリーフ

遺伝子組み換え種子を不使用とし、かつ土づくりを基本として栽培した農産物

ツーリーヴス

ワンリーフ基準の取り組み、かつ栽培期間中※1に、一部の農薬※2を不使用で栽培した農産物

スリーリーヴス

ワンリーフ基準の取り組み、栽培期間中※1に化学肥料および化学合成農薬を不使用で栽培した農産物

- スリーリーヴス　25名
- ツーリーヴス　18名
- ワンリーフ　45名

皆さんの求める農産物を85名の生産者が生産しています。

※1：前作の農産物収穫終了までの期間
※2：ネオニコチノイド系、グリホサート系の農薬

地消地産の取り組みである「ぎふラル」の普及拡大に向け、様々な媒体（SNS等）を活用したPRを実施しています!!

記者会見

消費者視点の農産物栽培基準「ぎふラル」を独自に策定し発表記者会見を2024年12月に行いました。多くのメディアに取り上げられました。

販売開始

「ぎふラル」農産物の販売が2025年6月より、おんさい広場3店舗（鷺山・はぐり・真正）で始まりました。

企業間連携

樽見鉄道と連携した特別列車「ぎふラルお弁当列車」を2025年11月と12月に運行し、乗客に「ぎふラル」のPRを行いまいた。

「環境保全型農業」の中でも特に水準が高い有機JAS認証の取得をめざし、有機農業に取り組む生産者育成や普及を図ります。また、消費者の皆さまには、有機農産物への理解の醸成につながる広報を行っていきます。JAぎふでは「有機の里」が、環境と調和した持続可能な農業を実践するための拠点になると信じ、有機農業に挑戦します。

有機の里構想3つの約束

①栽培・実証

未来につなぐ挑戦

JAぎふでは確立されていない有機栽培体系をさまざまな方法や理論で検証・実証し、環境と調和した栽培方法と経営モデルを作成することで、生産者が懸念するリスクや手間を軽減させ、地域への浸透を加速させます。

②生産者育成・栽培指導

未来を育む提案

技術や知識の発信拠点とし、多様な生産者がチャレンジできる環境を整備することで、新規就農者、有機転換希望者、有機農産物作付け組織を育成します。

③消費者理解の醸成

地域農業を守る理解

「食と農の連携フォーラム」との連携や交流イベント等により、持続可能な食料生産の実現に向けて生産者と消費者、双方の理解を醸成させ地消地産を拡大します。

有機の里構想イメージ

有機の里構想の展望

場所：岐阜市安食
面積：31,424㎡

令和6年度
地権者への説明等を進めながら有機農業の実証・栽培がほ場の確保と整備。
秋頃から有機農業の試験栽培を開始。

令和7年度
収穫された農産物をJAぎふの産直施設「おんさい広場」等で販売。学校給食への供給開始。

令和8年度
有機農業の栽培技術・知識を学ぶ生産者の受け入れ開始。
※令和5年度の秋から有機の里構想の実現に向け、計画的に取り組んでいます。

食と農を考える月

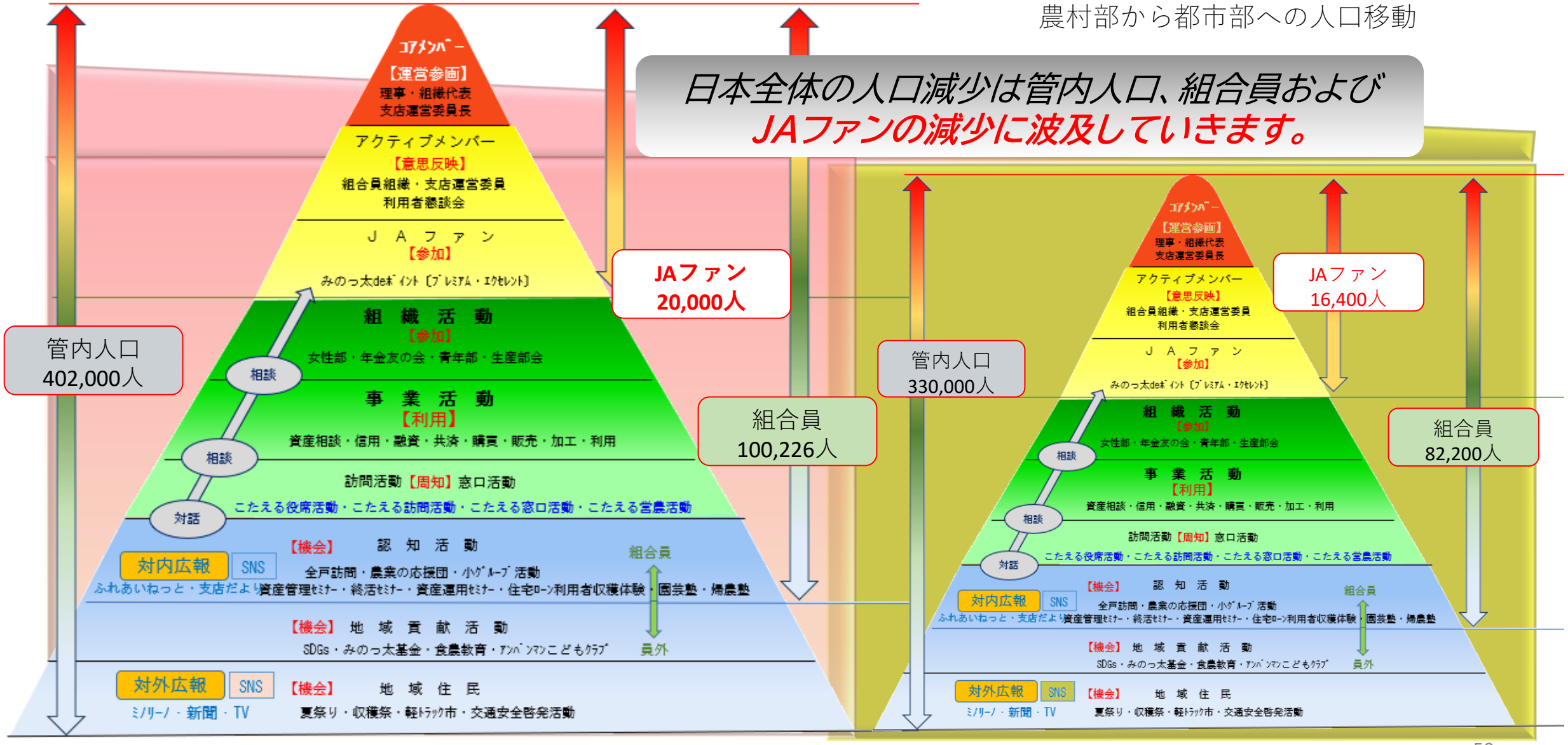
JA内部からの崩壊に対する危機感

組合員と「JAファン」がいなくなることが最大の危機

人口減少　少子高齢化　集落機能の崩壊

“世襲組合員”が減少合併・店舗再編等による精神的・物理的距離の拡大
農村部から都市部への人口移動

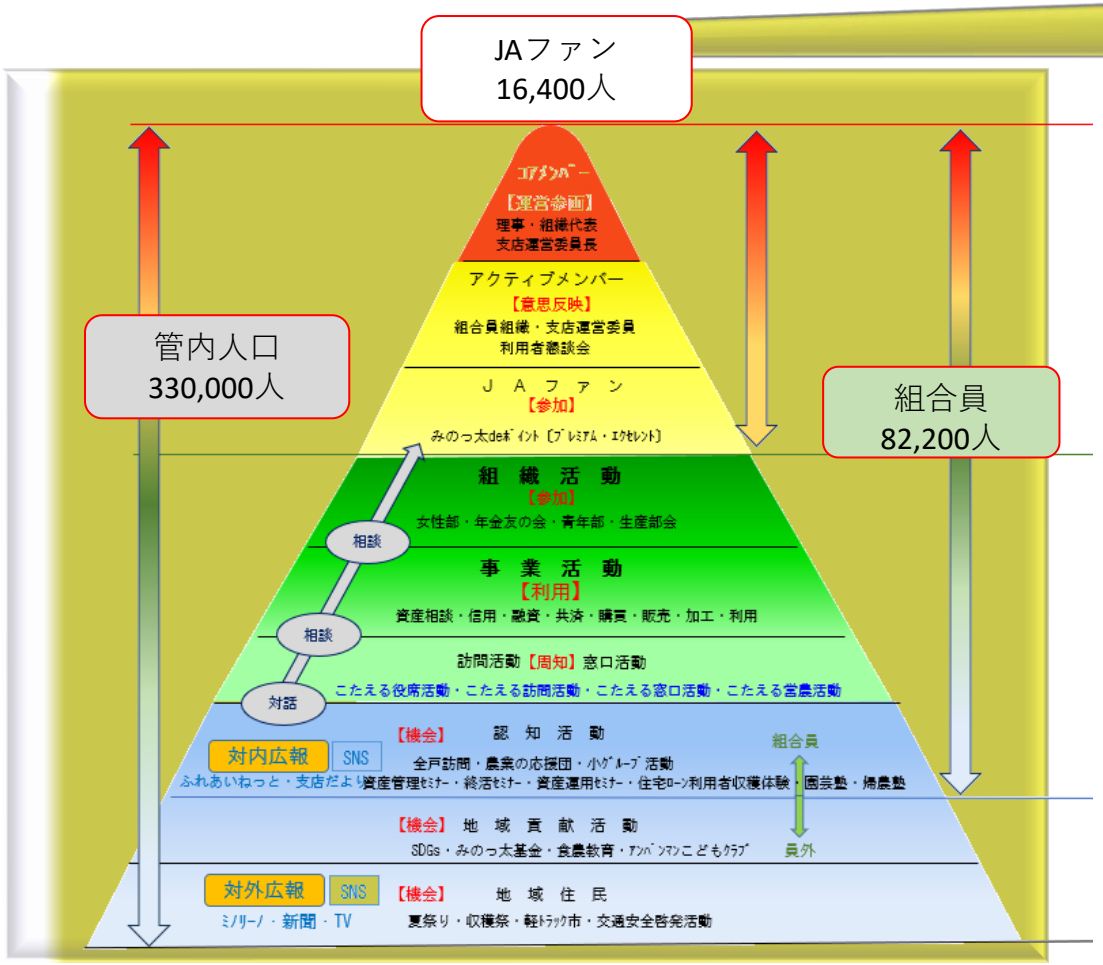
日本全体の人口減少は管内人口、組合員および
JAファンの減少に波及していきます。



２０２０年　　２０５０年

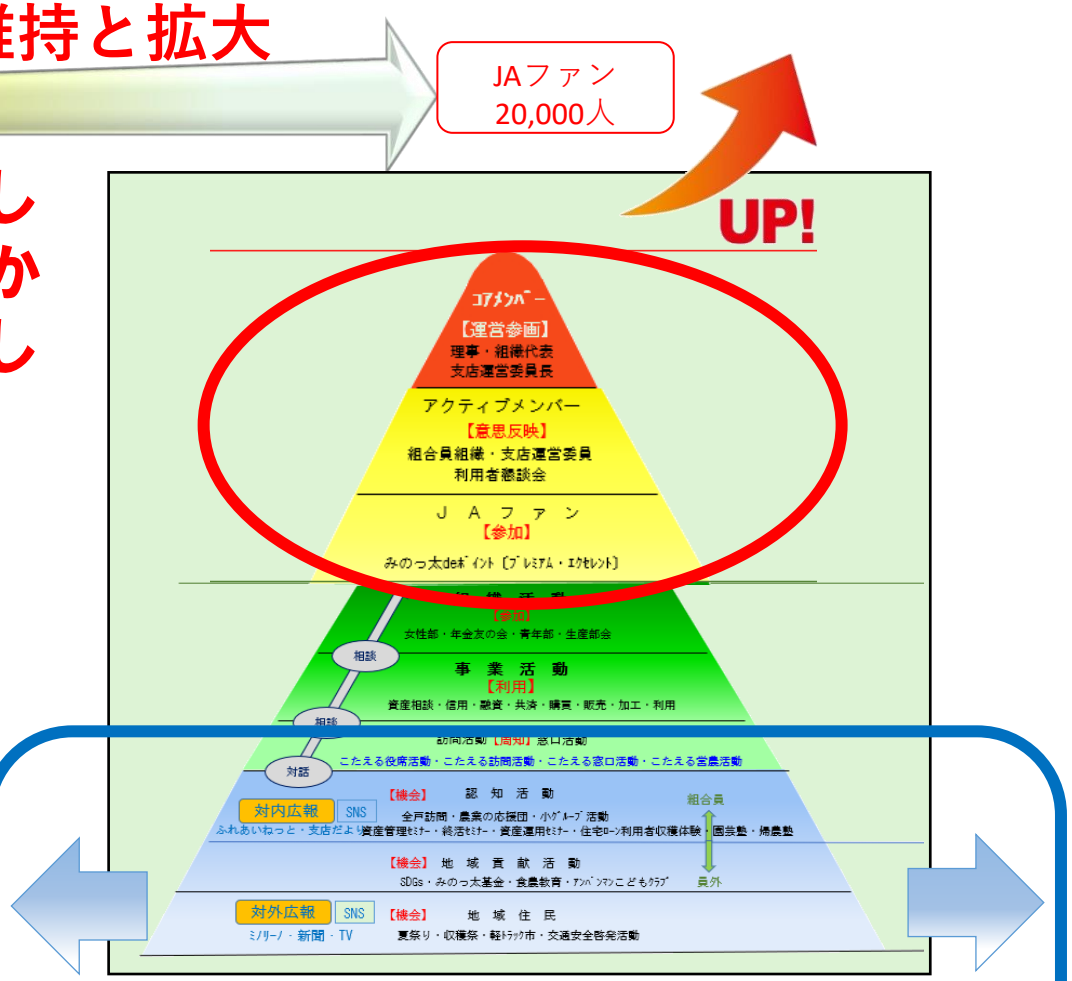
人口減少による組合員の減少は止めることはできない。

JAファン20,000人の維持と拡大



２０５０年

しかし
ＪＡファンの減少は
ＪＡの活動や努力でくい止め
増やすことができる！



さらに、JAが人と人のつながる活動を強化する事でJAへの理解者が確保できます。

JAぎふは「活力ある農業」と「豊かな地域社会」の実現に向け、5年前に掲げた「10年後めざす姿」を道標に、フレームワークで支店を中心とした総合的サービスで組合員の財産活用と暮らしを支援し、対話を通じて【JAファン層】の創出に努めてきました。農業振興では、部会中心の市場出荷と、地消地産の推進のため「有機の里」やJAぎふ独自栽培基準「ぎふラル」の展開や、毎年6月「食と農を考える月」による発信を継続しています。

生活協同組合コープぎふとの包括連携で、農家と消費者の架け橋を強化し、合同研修や交流イベントを通じ協同間協同を日常に根づかせ、地域住民へ『地域の中での協同組合の存在意義と提供価値』を伝え、協同組合への参加と理解の醸成に努めていきます。

少子高齢化による自然減の課題に対しても、協同の提供価値を高めることで組合員と【JA(コープ)ファン】の維持・拡大をめざし、対話と実践で地域の未来を耕します。